横浜国際高等学校

国際科国際バカロレアコース

進路のしおり

２０２６

目次

1．IB コースを選択して進学する　2

2．国内進学について　3

3．海外進学について　4 - 5

4．併願について　5 - 6

A）国内と海外の併願の場合

B）海外と海外の併願の場合

5．奨学金について　7

１. IB コースを選択して進学する

IB コース生は、国内・海外ともに、自身が３年間で培ってきたさまざまな能力や技能を総合的に駆使して進学していくことが基本になります。そのため IB コース生には、論文課題などへの取り組みを通じて表現力や論理的思考力を高めるとともに、課外活動で多様な経験を積むことが期待されています。自分の活動をポートフォリオとして記録しておくと出願準備の際に役立ちます。また、満足度の高い進学を実現するためには、大学が提示するアドミッションポリシーと自分自身の希望をよく照らし合わせる必要があります。大学・学部研究をしっかり行うとともに、自己分析を行い自分のこともよく知るように努めましょう。

３年間の流れ

1 年次：大学・学部を知る

IB コースでの学びを活かした進路選択ができるよう 1 年次から準備を始める必要があります。1 年次から始める大学研究は非常に重要です。それぞれの大学の特色（強み）を理解していくためには資料や書籍の読み込みも必要なため、時間がかかります。大学選びをスムーズに行うためにも 1 年次でのリサーチはしっかり行うべきです。自分がやりたいことがまだ見つけられていない場合も、いろいろな大学の情報に触れるにつれて自分の興味の方向性に気づくかもしれません。国内ならオープンキャンパスに参加するのがよいでしょう。海外ならオンラインでウェビナーに参加してみるとよいでしょう。海外の大学であってもウェブサイトから情報を入手することができるので、幅広く検索してみてください。また、9 月から 11 月頃に各国の大使館などが実施する留学フェアに参加し、情報収集をしましょう。フェアでは大学の入試担当者や卒業生と話ができるため、インターネットでは見つからないような情報も得られます。まずは大学・学部を知ることから始めましょう。

２年次：大学選択の準備

大学のことを知ると、その大学に合格するために自分が何をするべきかが見えてきます。例えば、IELTS 6.5 が必須条件の場合、あとどれくらいの積み重ねが必要で、いつまでにそのスコアに到達しないといけないかが明確になります。受験可能な時期や回数をよく検討して、出願までの計画を立てることが大事です。3 年次になる前に出願大学をある程度絞り込み、入試要項の内容や、海外大学のアドミッションがいつオープンするかを随時ホームページで確認しましょう。過年度の入試スケジュールを参考にすれば、２年次のうちからおおよその出願計画を立てることができます。余裕を持った準備を心がけましょう。

３年次：出願

実際の入試要項やホームページを確認し、前年度に立てた出願計画との差異を確認してください。志望理由書やエッセイ、また推薦書を仕上げるスケジュールが重要になってきます。まず必要なのは、２年間の学校生活を振り返りながら自己分析をすることです。自分は将来どのように生きていきたいか、どのように社会と関わり何に貢献したいのか、自分の情熱は何に向かっているのかなど 10 年先 20 年先の自分を想像してください。自己実現のためには、大学で何を学び、自分のどんな強みを伸ばす必要があるのか、また大学での学びに必要な資質を自分はいまどの程度持ち合わせているのか、といった問とじっくり向き合ってみてください。
徐々に思考が整理され、本当にやりたいことや行きたい大学もはっきりしてくるでしょう。志望理由書や出願エッセイの初稿を書き、推敲を繰り返し、完成させます。出願のプロセスは非常に時間がかかり、精神的に追い込まれることもあるかもしれませんが、焦らずに丁寧に取り組みましょう。

２．国内進学について

IB コースを選択して国内進学する場合、次のような選抜方法があります。

A) 国際バカロレア特別入試
B) 総合型選抜
C) 指定校推薦
D) 一般選抜

A)国際バカロレア特別入試

全国で 82 校の国公私立大学が IB スコアを活用した入試を行っています（文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム事務局調べ・2025 年 1 月時点 https://ibconsortium.mext.go.jp/about-ib/entrance-exam/ ）。具体的な選抜方法は大学によって異なりますが、多くの大学で EE や TOK での学びの成果をまとめたレポートの提出や CAS の活動報告が求められます。また、一定以上の IB スコアを出願要件として明記している大学もあるので、注意が必要です。

B) 総合型選抜

志望理由書をはじめ複数の書類を提出することが必要であったり、面接等の試験が実施されたりすることがあるため、入念な準備と対策が求められます（詳細は国際科の『進路のしおり』p.12 以下を参照）。なお、海外帰国生徒を対象とした総合型選抜であっても、IB コースでディプロマ資格取得見込みであれば、「帰国生」として出願資格を満たすことができる入試も存在します。

C) 指定校推薦

本校の IB コース生のみを対象とした推薦の依頼を受けることもあります。大学側から提示される推薦基準に加え、本校の校内推薦基準を満たす必要があります（詳細は同 p.11 を参照）。

D) 一般選抜

日本の教育課程と国際バカロレアのカリキュラムは異なるため、一般選抜で合格を狙う場合は授業外でそれ相応の準備が必要になります（詳細は同 p.４以下を参照）。

IB コース生としての学びを特にアピールすることができる選抜方法は、上記の A と B です。３年間で培った資質やスキルを活かしていきましょう。なお、卒業後、いわゆる「浪人生」として大学受験に IB スコアを利用する場合、IB が実施する最終試験を再受験しない限り、一度取得したスコアは更新されないことに留意する必要があります。

３．海外進学について

IBDP は国際的に認められた（中等教育修了）資格であり、世界中の大学への進学が可能であると言えます。海外の大学に出願するプロセスは国によって異なり、また大学によっても異なります。よく情報を収集し、適切に出願しましょう。

A) アメリカ

学力、課外活動への取り組み、人間的資質などが総合的かつ多面的に判断されます。面接を行う大学もあります。大学によっては出願エッセイ・推薦書が複数必要になります。出願エッセイは、自分の高校での活動や成長、人物像を読み手が容易に想像できるように執筆するのがポイントです。一般的な出願方法は Common Application というプラットフォームを通じて行いますが、州によって独自のシステムを導入している場合があるため、志望大学の出願方法をよく確認する必要があります。

B) イギリス

出願する学部に関する課外活動や、その分野を学ぶための資質が評価されます。アメリカと異なり学士課程が３年間に凝縮されているため、専門分野を学ぶ準備がどれだけできているかをアピールすることがポイントです。また、基本的に UCAS というプラットフォームを通じて５校に同時に出願するため、特定の大学に対する志望理由よりも、学部の志望理由とともに「なぜイギリスなのか」を述べることが一般的です。

C) オーストラリア

基本的には IB スコアで合否が決まります。また、出願と同時に奨学金の申請が行われることが一般的です。出願は、「オーストラリア留学センター」等、オーストラリア政府の認定を受けた日本国内の公式出願窓口を通して行うことができます。公認エージェントの無料相談を早めに受けましょう。

D) カナダ

大学により入試の内容が異なります。IB スコアや学校の成績等、証明書を提出するだけでよい場合もあれば、複数のエッセイ提出を求められたり、面接が行われたりすることもあります。アメリカ同様、Early と呼ばれる早期出願の制度があります。また、州によって出願システムが異なるため、州をまたいで複数の大学に出願する場合には注意が必要です。

E) その他

ヨーロッパの大学では CV（Curriculum Vitae）やエッセイの提出が求められることがあります。CV は履歴書に近く、アルバイトなどの経験も記載します。大学によっては、数学などの試験が別途実施されます。非英語圏であっても、学部進学において英語プログラムを開講している大学を選択することで、現地の公用語を身に付けていなくても進学が可能になる場合がありますが、生活する上で現地の言語習得は必要不可欠になるでしょう。

海外大学へ出願する場合、卒業するまでに進路が決定しない場合もあります。また、合否の結果通知が早い場合もあれば、最終的な通知期限ぎりぎりの場合もあります。焦らず、信じて待ちましょう。

補足

1. 英語の外部試験
大学は留学生に対して、一定の英語力を有していることの証明を求めます。その英語力に達していれば、直接大学に入学することが可能ですが、基準スコアに達していない場合、ファウンデーションコースと呼ばれる大学準備コースで英語力を伸ばす必要があります。英語に不安がある生徒にとっては、ファウンデーションコースは海外に挑戦するための大きな助けとなります。ただし、修了には１年程度を要するため、たとえばイギリスやオーストラリアの学士課程は本来３年で卒業が可能ですが、卒業までに４年程度の時間が必要になる可能性が高くなります。

2. ギャップイヤー（Gap Year）の活用
海外の大学には「ギャップイヤー（Gap Year)」という制度が設けられている場合があります。これは、大学が入学前や在学中に休学することを許可するもので、それによって得られた時間はインターンシップ、ボランティア、留学など、さまざまな経験を積むために活用されます。大学から合格をもらったのち、その手続きを行うことになります。ギャップイヤーを利用する場合は、自分が何のために休学をするのか、目的意識をもち、より充実した大学生活を送れるようにしましょう。

４．併願について

併願を検討する際に、最も注意すべき点はスケジュール管理です。最大で以下の４つのプロセスが同時進行で行われることを意識しましょう。出願する大学、国をどのように絞り込むかが成功のカギとなります。

1. 国内大学
基本的に国内の出願は９月頃を皮切りに 11 月頃までがピークになります。大学によって、２月頃まで出願がある場合もあります。
2. 海外大学
国によって異なりますが、翌年の秋入学を目指す場合、10 月頃から始まり、１月頃までがピークになります。例えば、国ごとの締め切りの目安は、アメリカの場合、早い（Early）出願は 10 月、通常は１月頃、イギリスのケンブリッジ大学・オックスフォード大学は 10 月、それ以外の大学は１月、オーストラリアは１月頃、カナダは最終的な出願が１月頃です。
3. DP の総括的評価課題
４・５月頃までにほぼすべての科目で内部評価（IA）が行われます（詳細は『DP ハンドブック』所収の Assessment Calendar を参照してください)。その後、主に国内の出願に活用される MOCK１が実施されます。また、９月には海外出願でも活用される MOCK２が実施されます。10 月下旬にはいよいよ最終試験が始まります。
4. 奨学金
日本学生支援機構（JASSO）の海外進学希望者向け奨学金の申し込みを行う場合、９月から 10 月に申し込みを行います。具体的な留学の目的、将来の展望などを書面で提出することが求められます。また、１次審査を通過した場合は面接も行われます。その他の国内で申請する奨学金も同じような時期に選考が行われることが多いので注意しましょう。

A）国内と海外の併願の場合

３年次の４月には、自己分析と大学・学部研究を本格化させていきます。一貫した学部への志望理由と将来の展望を固め、出願の締め切りが早い大学から順次エッセイの初稿を完成させるとともに、教員に依頼する推薦書の内容を検討する必要があります。

それぞれの締め切りに出願書類を間に合わせるためには、少なくとも初稿を締め切りの２か月前までに仕上げることをお勧めします。しかし、イギリスは１月下旬が締め切りのため、２か月前は最終試験中になります。そのため、夏には初稿を書けていると安心です。

エッセイや推薦書の執筆に並んで重要なのが、MOCK１と２です。下の例で例えば A 大学に出願する場合、現行の評価スケジュールでは MOCK１を活用することになります。B 大学は MOCK２を活用します。この場合、両方の MOCK の結果が出願に影響するため、受験のピークが長いということになります。精神的体力的な負担も大きくなります。どちらの MOCK に重点を置くかということも、出願校を決める際のポイントと言えるでしょう。MOCK で算出される「見込み点（Predicted Grade)」によって出願できる大学が変わる可能性があります。自分の目指す大学のスコアに見込み点が届くよう学習に励みましょう。

例１　国内とイギリスの併願（ケンブリッジ・オックスフォード大学を除く）

	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月
国内A大学			エッセイ初稿			出願〆切					
国内B大学					エッセイ初稿			出願〆切			
国内C大学							エッセイ初稿			出願〆切	
UK					エッセイ初稿					出願	
DP	IA	IA	MOCK１			MOCK２	最終試験	最終試験			
JASSO（海外向け）				エッセイ初稿			申込〆切				

B）海外と海外の併願の場合

出願の準備における時間と労力という点において、複雑さは異なりますが、おおよそ、①アメリカ、②イギリス/カナダ/ヨーロッパ、③オーストラリアの３つのタイプに分けられます。①と②の併願よりも、①と③の併願の方が比較的容易であると言えます。しかし、出願の複雑さよりも、自分が何をどこで学びたいかということを一番大事にして、出願先は検討するべきです。

例２はアメリカ(Common Application 活用による出願)の早期出願(Early Action/Decision)、通常出願（Regular Decision)、イギリスの出願（ケンブリッジ・オックスフォード大学を除く）の出願締め切りを示しています。アメリカの Early Decision の場合、専願の扱いになりますので（Early Action はその限りではない)、出願には注意が必要です。早期出願で合格が決まらない場合に備えて、通常出願とイギリスの準備を同時進行で行います。例２のように、夏に初稿を書くことになるので、それまでに自己分析等を進めることをお勧めします。

例２　アメリカ(Common Application 活用)とイギリス（ケンブリッジ・オックスフォード大学を除く）の併願

	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月
US早期出願					エッセイ初稿			出願〆切			
US通常出願							エッセイ初稿			出願	
UK					エッセイ初稿					出願	
DP	IA	IA	MOCK１			MOCK２	最終試験	最終試験			
JASSO（海外向け）				エッセイ初稿			申込〆切				

５．奨学金について

海外進学の際に、最も多く聞かれる質問の一つに奨学金があります。一般的に国内大学に進学する場合、奨学金は給付型（返済不要）と貸与型（返済必要）に分かれますが、海外進学においては scholarship が返済不要の奨学金、financial aid が貸与型の奨学金（学費援助）になります。海外進学者向けの奨学金には、①国内で申し込むものと、②海外で申し込むものがあります。

① 国内で申し込む奨学金は、日本学生支援機構（JASSO）の国費による支援をはじめ、柳井正財団、公益財団法人グルー・バンクロフト基金、リクルートなどがあります。しかし、海外進学者向けの奨学金の競争率は高く、非常に狭き門になっています。

② 海外で申し込む奨学金は、合格後に大学から提供される奨学金も含まれます。渡航前に学費の免除率が提示されることもあります。イギリスは、初年度のみの奨学金の場合が多いですが、アメリカの場合は、在学中に成績優秀者に奨学金が出るケースもあります。大学ごと学部ごとに奨学金の内容も異なるため、大学選びの際に、留学生向けの奨学金の有無、学部ごとの奨学金の有無等は、大学のアドミッションに問い合わせましょう。

さらに、出願の際に奨学金を申し込む場合には(そうでない場合と)提出書類が異なる場合がありますので、事前によく確認しましょう。アメリカの場合は、奨学金を希望する場合としない場合で、合否に影響する大学もあります。各大学のアドミッションの仕組みをよく調べましょう。

奨学金以外にも、寮費などを免除してもらえる制度がある大学もあります。例えば、寮の管理人として寮生をまとめるリーダーを引き受けると寮費の一部免除等がある大学があります。経済的な負担軽減策について事前に調べることで、海外進学におけるハードルを一つクリアできるかもしれません。

奨学金については、常にアンテナを張っておき、探し続けることが大事です。国内で申し込む奨学金だけでなく、進学後に大学で申し込む際にも情報収集の労を惜しまないようにしましょう。

（参考）

海外留学支援サイト. (n.d.). 海外留学支援サイト. Retrieved June 28, 2024, from https://ryugaku.jasso.go.jp/scholarship/